



タブレット型端末を活用した音楽創作の授業実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2014-09-08 キーワード: 作成者: 渡辺, 景子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006243

タブレット型端末を活用した音楽創作の授業実践

渡 辺 景 子

北海道教育大学附属札幌中学校

A practical research for creative music making with using tablet-type device

WATANABE Keiko

Sapporo Junior High School Attached to Hokkaido University of Education

概 要

本稿は、創作の授業における問題点を明らかにし、中でも特に生徒の記譜力・読譜力・演奏技能不足の問題を解消するために、タブレット型端末を活用した創作の授業を提案するものである。操作が簡単であり、薄く軽量で様々な授業形態に対応できるという特長があるタブレット型端末を活用した創作の授業として、変奏の手法を取り入れた「音の高さとリズムを変化させて旋律をつくろう」という授業を構成した。授業の実際の様子と、生徒に実施したアンケートから、操作の簡単さ、再生機能の活用、創作過程の保存による効果が見られ、創作の授業における記譜力・読譜力・演奏技能不足の問題を解決するばかりではなく、生徒の創作のアイデアを広げ、創作する楽しさや喜びを体験することにつながるのではないかと考える。

I はじめに

中学校音楽科における創作の授業においては、従来、あるルールに従って創作した音楽を生徒自身が演奏して発表するという実践が多かったのではないかと考える。自作自演を前提にした題材構成・授業形態が一般的であるため、創作した音楽を生徒自身が客観的に見つめ、音楽的に吟味する場面が指導過程に設定されていない場合が多い。

では、具体的にどのような問題を解決していく必要があるのだろうか。創作の授業が課題とされている原因の一つには、教師側の創作の授業に対する姿勢に関わる問題があげられる。今村・酒井

は、現行の学習指導要領において創作の充実を図ることが示されたことに対し、「創作は時間がかかりそうだ」「授業の進め方がよくわからない」などの理由で、すべての学校で創作の授業が行われているとは言えない状況があったのではないかとしている¹⁾。また高須は、先生方の多くは、「音楽づくり」＝「機能と声とを反映した作品づくり」などととらえ、校種を問わず、いずれの先生方も音楽づくりは「苦手」「あまりやってこなかった」「音楽の理論の方が先になってしまい、音楽づくりを楽しく進められない」と考えているようだとしている²⁾。現行の学習指導要領においても、「理論的な学習を先行させ過ぎたり、はじめからまと

まりのある音楽をつくることを期待したりするのではなく³⁾」「あらかじめ楽曲形式を決めて、その形に当てはめていくようになっていくのではなく⁴⁾」と記載されており、ここに教師の創作の授業に対する姿勢の問題点が隠されていると考える。

さらに高須は、音楽づくりにおいて最も克服すべき課題として、教員が「子どもはお話や具体的なイメージがないと音楽をつくることができない」と信じ込んでいることをあげている⁵⁾。従来の授業では、気分・気持ち・イメージ・情景などといった創作者の心情的な思いや意図ばかりが強調されることによって、音楽そのものの創意工夫や新たなアイデアへの関心が薄くなり、自分や仲間が創った音楽のよさを発見しにくい状況を作り出しているのではないかと考える。

一方、生徒側にはどのような問題点があるのだろうか。先に記した従来の授業においては、イメージ通りに楽譜を記すことができない、またそれらを読み解くことができないという記譜力・読譜力不足の問題が内包されている。現行の学習指導要領においても、指導上の配慮事項として、「つくった音楽を、五線譜だけではなく、文字、絵、図、記号、コンピュータなどを用いてどのように記録するかについて工夫させる⁶⁾」ことも大切とされている。また、自作自演を前提とした授業には、楽譜に記せたとしても演奏で再現できないという演奏技能不足の問題も含まれる。藤沢は、創作の授業においては必ずしも演奏を含まないとしながらも、生徒がつくった音楽（作品）は、自分たちが演奏しなければ永久に音になることはない、したがって、作品が完成したらなんとしても演奏を行わなければ創作の授業を終えることはできない⁷⁾としている。しかし、創作の授業において大切にしなければならないことは、「生徒が、音のつながり方を試しながら短い旋律を作ったり、音素材を選びまとまりを工夫して音楽をつくったりするなど、音を音楽へと構成していく体験を重視する⁸⁾」こと、つまり、作品を完成させることや演奏することではなく、その過程である。このよう

に、創作の授業における記譜・読譜・演奏が、音楽をつくる喜びや、工夫する楽しみを阻害している可能性がある。

本研究は、タブレット型端末を使用して授業を行うことで、特に生徒側の問題である記譜力・読譜力・演奏技能不足の問題を解決していこうとするものである。

Ⅱ 研究の視点

筆者のこれまでの実践では、授業形態を工夫し、音楽を捉える視点を作曲者・演奏者・聴き手と意識的に変化させることで自分の創作した作品を客観的に見つめ直したり、創作の過程を振り返ったりしてきた^{註1)}。本研究は、タブレット型端末（iPad）をはじめとする電子機器を教具として効果的に用いることで、創作の授業の活性化をねらい、先にあげた問題点を解決していこうとするものである。

タブレット型端末は、①基本操作が簡単である、②学びの過程を記録として残すことができる、③薄く軽量なため様々な授業形態に対応できるという特長がある。教具として使用することで、生徒個人が「音を音楽へと構成していく体験」を助けることに加え、生徒相互の学び合いにより、創作の授業を活性化できるような効果が期待できる。

更に、現在はタブレット型端末とともに、様々な音楽アプリケーションが普及しているが、それらを利用した音楽科の授業実践は極めて少ない。タブレット型端末を学校に導入することへの難しさもあるが、提案されている授業についてもカメラアプリを利用して模範演奏を視聴したり⁹⁾、自分の演奏を撮影し、それを視聴することで自分の演奏の様子を客観的にとらえ、演奏に工夫・改善を加えたりするもの¹⁰⁾である。他にも作品鑑賞のため、譜面として楽器演奏の補助ツールとして、チューナーとして、打楽器としての使用方法が提案されている¹¹⁾が、アプリの紹介にとどまっておき、実際の授業においてどのように活用していくのかという研究はまだ進んでいないのが現状で

ある。従来の創作領域における実践と、電子機器や電子楽器、様々なソフトやアプリケーションを活用した実践が結びつくことで、新しい授業の可能性が広がると考える。

1年A組～C組(125名)、2年A組～C組(126名)^{註2)}

2. 実施期間

平成25年11月～平成26年2月

3. 題材・教材

音の高さとリズムを変化させて旋律をつくろう

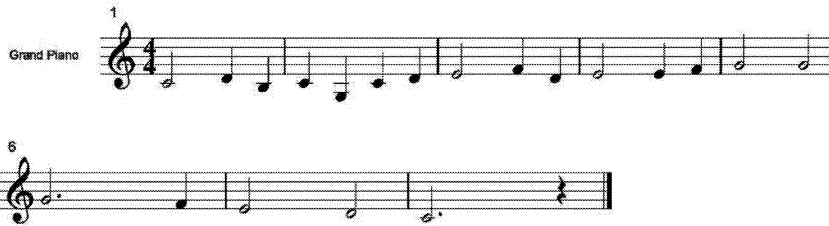
カノン1 / M. ハウプトマン (教育芸術社・中学生の器楽 p.10)

Ⅲ 実践研究

1. 研究対象

北海道教育大学附属札幌中学校

【カノン1】



4. 題材の目標

- (1) 単旋律における音の高さやリズムの変化と、それに伴う音楽の雰囲気やイメージの変化に関心をもち、簡単な単旋律創作に主体的に取り組む。
- (2) 単旋律における音の高さやリズムの変化を

知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、どのような旋律をつくるかについて思いや意図をもつ。

- (3) 音の高さとリズムの変化を生かして音楽表現をするために必要な楽譜ソフトの操作方法を身に付けて、簡単な単旋律をつくる。

5. 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
単旋律における音の高さやリズムの変化と、それに伴う音楽の雰囲気やイメージの変化に関心をもち、簡単な単旋律創作に主体的に取り組んでいる。	単旋律における音の高さやリズムの変化を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、どのような旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。	音の高さとリズムの変化を生かして音楽表現をするために必要な楽譜ソフトの操作方法を身に付けて、簡単な単旋律をつくっている。

6. 題材の指導と評価の計画 (6時間扱い)

時	○学習内容 ・主な学習活動 ※留意点	◇評価規準 ◆評価方法
1	○楽譜作成アプリSymphony Pro (Xenon Labs, LLC) の操作方法を知る。 ・音符・休符の入力方法や、再生の方法等、創作に必要な機能とその操作方法を知る。 ○もとの旋律(カノン1)の「音の高さ」に変化を加えると、旋律はどのように変化するのだろうか。	◇音楽への関心・意欲・態度 単旋律における音の高さの変化と、それに伴う音楽の雰囲気やイメージの変化に関心をもち、簡単な単旋律創作に主体的に取り組んでいるか。 ◆観察, ワークシート

	<p>・下の条件にしたがって、もとの旋律の「音の高さ」を変化させて、単旋律を創作する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">ト音譜表, 白鍵限定, 速度変化× (四分音符=100に固定), リズム変化×</div> <p>※本時では、上の条件を満たすアイデアにはどのようなものがあるか広げること、音の高さを変化させるとどのように音楽の印象が変わるのかについて、ねらいをおいている。</p> <p>※題材全体を通して、再生機能を利用し、創作した作品についてよく聞くように促す。</p> <p>・創作した作品の交流を行い、アイデアを共有する。また、もとの旋律との違いを、知覚・感受する。</p>	<p>◇音楽表現の創意工夫 単旋律における音の高さの変化を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、どのような旋律をつくるかについて思いや意図をもっているか。◆観察, ワークシート, プロジェクト</p>
2	<p>○もとの旋律の「リズム」に変化を加えると、旋律はどのように変化するのだろうか。</p> <p>・下の条件にしたがって、もとの旋律の「リズム」を変化させて、単旋律を創作する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">8小節, 音の順序変化×, 速度変化×</div> <p>※1時間目と同様に、アイデアを広げること、リズムの変化による音楽の印象の変化や違いにねらいをおいている。</p> <p>・創作した作品の交流を行い、アイデアを共有する。また、もとの旋律との違いを、知覚・感受する。</p>	<p>◇音楽への関心・意欲・態度 単旋律におけるリズムの変化と、それに伴う音楽の雰囲気やイメージの変化に関心をもち、簡単な単旋律創作に主体的に取り組んでいるか。◆観察, ワークシート</p> <p>◇音楽表現の創意工夫 単旋律におけるリズムの変化を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、どのような旋律をつくるかについて思いや意図をもっているか。◆観察, ワークシート, プロジェクト</p>
3	<p>○もとの旋律の音の高さとリズムに変化を加えて、旋律を創作しよう。</p> <p>・参考作品を提示し、本日の学習内容や創作の条件について確認する。</p> <p>・下の条件にしたがって、もとの旋律の「音の高さ」と「リズム」の両方を変化させて、単旋律を創作する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">ト音譜表, 白鍵限定, 8小節, 速度変化×</div> <p>※一つの作品について、音の操作と知覚・感受とを関わりながら創作を行うよう促す。</p>	<p>◇音楽への関心・意欲・態度 単旋律における音の高さやリズムの変化と、それに伴う音楽の雰囲気やイメージの変化に関心をもち、簡単な単旋律創作に主体的に取り組んでいるか。◆観察, ワークシート</p> <p>◇音楽表現の創意工夫 単旋律における音の高さやリズムの変化を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、どのような旋律をつくるかについて思いや意図をもっているか。◆観察, ワークシート, プロジェクト</p> <p>◇音楽表現の技能 音の高さとリズムの変化を生かして音楽表現をするために必要な楽譜ソフトの操作方法を身に付けて、簡単な単旋律をつくることができたか。◆ワークシート, プロジェクト</p>
4	<p>○自分の作品をよりよいものにするには、音の高さとリズムの変化に、どのような工夫をするとよいのだろうか。</p> <p>①</p> <p>・前時で創作した生徒の作品を参考に、本日の学習内容について確認する。</p> <p>・どのように作品を作ってきたか、どのような点を聞いてほしいか、どのような点についてアドバイスをもらいたいかについて整理する。</p> <p>※前時の内容を整理することで、作品についての思いや意図を明らかにしていく。</p> <p>・4人グループで交流を行う。新しいアイデアについては、実際に楽譜に打ち込んで試してみる。</p> <p>※交流を通して、作品についての思いや意図を明らかにしていく。</p>	<p>◇音楽への関心・意欲・態度 音の高さやリズムを工夫することによって生まれる自分と仲間の作品のアイデアや音楽的な雰囲気の違いに関心をもち、主体的に学習に取り組んでいるか。◆観察, ワークシート</p> <p>◇音楽表現の創意工夫 自分の作品に対する思いや意図を明らかにすることができたか。◆観察, ワークシート, 創作過程のプロジェクト</p>

5	<p>○自分の作品をよりよいものにするには、音の高さとリズムの変化に、どのような工夫をするとよいのだろうか。</p> <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時の交流をもとに、音の高さとリズムの変化に工夫を加えることで、作品を完成させる。 <p>※仲間の意見を参考としながら、最後は自分で判断することを促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表会エントリーシートの記入を通して、これまでの創作の過程を振り返り、発表の準備をする。 <p>※どのような手順で創作を進めたかを明らかにし、特に工夫をした点や聞くポイントとなる点を整理する。</p>	<p>◇音楽への関心・意欲・態度</p> <p>※第3時に同じ</p> <p>◇音楽表現の創意工夫</p> <p>※第3時に同じ</p> <p>◇音楽表現の技能</p> <p>音の高さとリズムの変化を生かして音楽表現をするために必要な楽譜ソフトの操作方法を身に付けて、簡単な単旋律を完成させることができたか。◆ワークシート、プロジェクト</p>
6	<p>○発表会をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作曲者は、創作の過程や作品にこめた思いや意図を紹介し、iPadによる演奏で自分の作品を発表する。 ・鑑賞者は、「おもしろさ」「美しさ」の2観点と、自らが定めた1観点の3観点で、それぞれの作品を評価する。 	<p>◇音楽への関心・意欲・態度</p> <p>音の高さやリズムを工夫することによって生まれる自分と仲間の作品のアイデアや音楽的な雰囲気の違いに関心を持ち、主体的に学習に取り組んでいるか。</p> <p>◇音楽表現の創意工夫</p> <p>自分の作品に対する思いや意図を明らかにし、発表と作品の演奏を通して伝えることができたか。</p>

7. 授業の実際

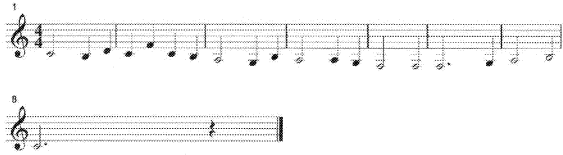
第1時では、iPadの操作に慣れることと、音の高さを変化させるアイデアをできるだけ広げることを目指している。Symphony Proは英語のアプリであるため、英語に苦手意識を持っている生徒や音楽用語に不安がある生徒にとっては抵抗があったようである。しかし、音符や休符の直接入力に加え、ピアノの鍵盤画面を利用しての音符入力が可能であるため、鍵盤を使用して音を出しながら気に入ったものをあてはめていくという形で創作ができる生徒も多かった。

第2時においても、リズムを変化させるアイデアをできるだけ広げることを目指している。Symphony Proでは、全音符から64分音符の入力が可能であり、その機能を利用して、多くの生徒が2分音符を64分音符32個に分割するなど細かくして創作を行っていた。それらの作品について実際にピアノを使用して演奏することはほとんど不可能だが、iPadでは演奏が可能のため、今まで出会ったことのない音楽を楽しんでいる様子であった。「iPadはピアノの代替楽器の役割」というよりは、「iPadという楽器を操作し創作している」という感覚ではないだろうか。

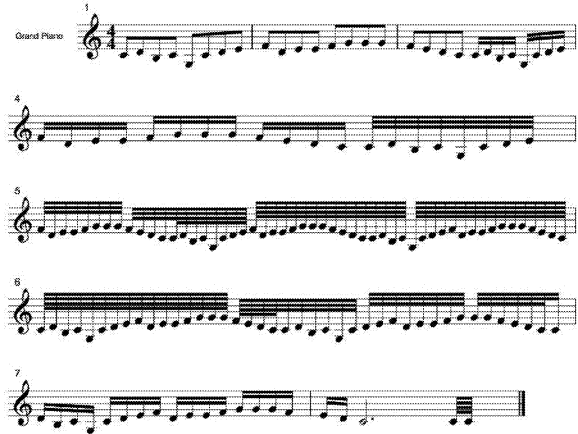
この第1時・第2時において興味深いのは、音を音楽へと構成していく体験を通して、新たなルールや形式が形成される点である。

【譜例1】は、「下の音（下第一線）で線対称にしてみると、はじめと終わりがちょうどよかった」という生徒の作品である。この作品を全体で交流した場面では、「もともとこういう曲だったみたい」「もとのメロディーとハモリそう」などといった意見が交わされていた。さらに、違う音を基準に線対称で創作したり、五線を1本の線に見立てた線対称で創作したりなど、工夫を加えた新たなルールを作り創作している生徒がいた。【譜例2】は、「最初に8分音符でつめたら小節があまったから繰り返して、ただ繰り返すだけじゃつまらないから、リズムを細かくした」という生徒の作品である。この作品を全体で交流した後は、どのように反復するとおもしろいのか、音符を細かくしてある小節につめて、余った小節をどのように使うとおもしろい作品ができるのかということについて、意見が交わされていた。

【譜例 1】(2年男子)



【譜例 2】(2年男子)



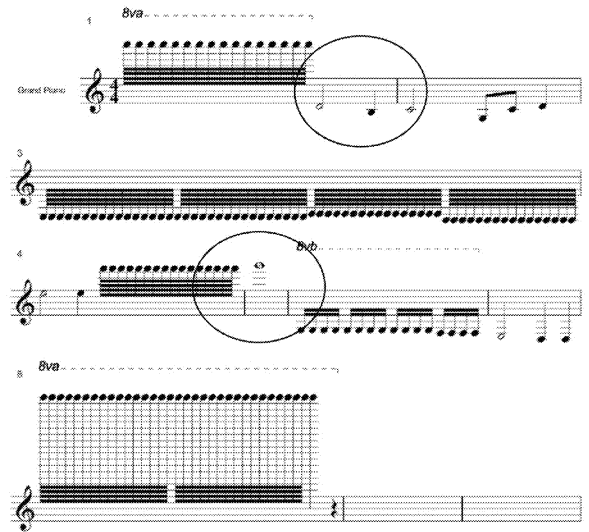
第3時から第5時では、第1時・第2時で広げた創作のアイデアを使い、音楽を構成していくことをねらった。【譜例3】は、ある生徒が第3時で創作したものである。楽譜プロジェクトについては、データを上書きしていくのではなく、創作途中のものをデータとして残していくよう促した。また、【ワークシート1】のように、作り方の手順・方法・アイデアとそれによってもたらされるイメージ等を記述した。楽譜とワークシートを効果的に活用することで、自分の創作の過程を残し、適宜振り返ることで創作活動に活かすことが可能である。

第4時では、【写真1】のようにiPadを囲んで交流を行った。画面の楽譜を見ながらグループで作品を聴き合い、お互いの作品のよさやおもしろさについて交流を行った。また、創作で困っている点や工夫を加えたい点について新たな創作のアイデアを交流し、その場で音を打ち込んで再生することで、アイデアを具現化し共有することが可能である。【譜例3】を創作した生徒は、その交流を通して、【譜例4】や【ワークシート2】のように、リズムの工夫を加えることができた。

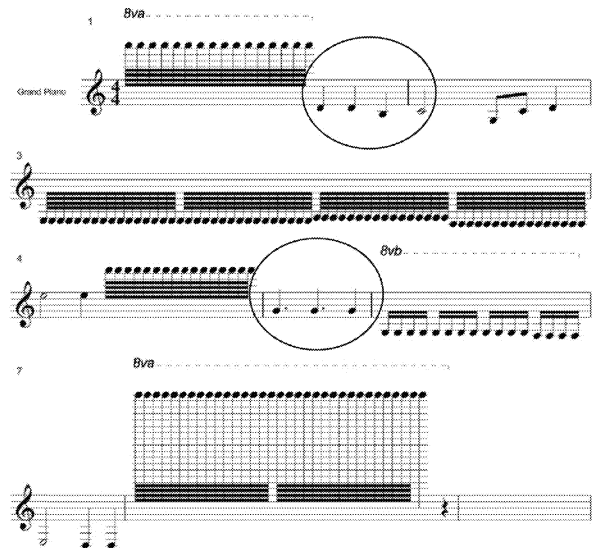
【写真1】註2)



【譜例 3】(1年女子)



【譜例 4】(1年女子)



【ワークシート1】 ※矢印は、生徒に確認の上、筆者が記入

◆どうやってつくった？

作り方の手順・方法・アイデア	どんな感じ？（イメージ、聞いた感じ）
（初めを4オクターブ上げた）	→ 明るい感じ
（全21オクターブ下げた）	→ 急に暗くなった
（1オクターブ上げた音と 2オクターブ上げた音を混ぜた）	→ と2も極立っていた
（直前を2オクターブ下げた）	→ 終わりの所をより極立っていた
（終わりを7オクターブ上げた）	→ 電話の着信音のようになった

【ワークシート2】

④ 12/5 (水)

今日は作曲者側がいた。聴き手からは、途中から面白い、という意見をもらったので、私は音低を変えずにリズムだけ変えたの音を細かくすると、
(音程)
 実験前よりはインパクトの強い、マニマニがさらに極立っている感じになった。
(最後の64分音符連続部分) (旋律)

【譜例5】は、「もとの旋律の音を残しながら、分散和音を意識してつくりました」という生徒の作品である。この作品については「すごい」「きれい」という感想ばかりではなく、「分散和音って何？」「2小節目は1拍目とそれ以外で形が違うけど、これも分散和音なの？」という問いが自然に生まれていた。また、「リズムが単調」なことに着目し、「この16分音符のある部分だけ32分音符に細かくしたら、もっとおもしろいんじゃない？」「付点16分音符を使って、変化をつけてみたら？」という意見が交わされた。音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語について創作活動を通して理解を深め、作品についての意見交流を通して適切に用いる姿、さらには新たな創作のアイデアを伝え合う姿が見られた。

【譜例5】（2年男子）

IV まとめ

創作の授業において、生徒側の課題であった記譜力・読譜力・演奏技能不足の問題は解消されたのだろうか。

同じ題材について、キーボードとワークシート

の五線譜を利用して1時間目の授業を行った2年生の学級に実施した、「iPadでの創作のよいところに関わるアンケート」（自由記述）によると、タブレット型端末での創作の授業の特長は、以下の3点に大きく集約される。

1点目は操作の簡単さによる効果である。「面倒なことや難しいことも簡単にできた」「音を変えるのがめっちゃ楽！」という記述があった。スマートフォンやタブレット型端末を所持している生徒も多く、操作に慣れていることも要因のひとつであると考えられる。さらに「iPadでつくるといふことそのものが楽しい」と、タブレット型端末を使うことそのものが学習意欲につながっている生徒も多かった。

2点目は再生機能による効果である。「前は自分で作ったメロディーがひけなくて悲しかったけれど、今回はやってくれてうれしかった」「演奏してくれるので助かった」「間違わないで弾いてくれるところや、速さも一定で弾いてくれるところがよい」という記述があった。個人で創作しているときにも、楽譜に打ち込むばかりではなく、スピーカーに耳をあて、しきりに聴いている様子が印象的だった。また、再生する際にどこを演奏しているのかというガイドが表示されることを取り上げ、「線（ガイドのこと）があって、どこが

変だったかわかりやすかった」「どこを演奏しているのかわかった」など、記譜力・読譜力不足を補う一面も見えてきた。

3点目は創作過程の保存による効果である。「ためしにつくれるところや、消すのに手間がかからないところがよい」「途中で変になったら、戻れるところ」など、アイデアや創作過程を保存することが学習の助けになった生徒が多かった。途中で失敗してもそれより以前の過程に戻れる安心感や、いくつか作ったものを聴き比べることで自分のお気に入りを見つけられることが、生徒の創作活動を活性化させていたように思う。また、他人の作品へアドバイスをするとすると他人事になりがちな交流の活動が、実際に音を打ち込んで試してみることで自分事としてとらえられていた。アドバイスをもらう側も、保存した楽譜プロジェクトを見直すことで、もらったアドバイスによって自分はどのように考えその作品を完成させたのかということ、自分で説明することができた【ワークシート3】。

このように、タブレット型端末を使用した創作の授業は、記譜力・読譜力・演奏技能不足の問題を解消する糸口があるばかりではなく、再生や保存の機能を活用することで、生徒の思考が深まり、創作活動の活性化につながっていたといえる。

【ワークシート3】

<p>どのように変化させたのか (ワークシートを参考にまとめる)</p>	<p>私は楽しい感じにしたからたのも最初はリズムを4分の1にしてリズムを長くしました。符点を付けてたり高低差を付けて。リズムの長さを変えた方がより楽しくなるのではないかとアドバイスカあったので、8分音符を入れたり、64分音符を入れたりしたことにより、楽しいリズムとともにキレイなメロディーをつくることになりました。このように変化させていきました。</p>
<p>特に工夫した点 ききどころ 注目してほしい ところ</p>	<p>7、8小節目はもう最後の方なので楽しい雰囲気から落ちつかせるようにして終わらせたので、キレイなメロディーになるように、7オクターブ上、ふつら1オクターブ下、ふつらとこのを繰り返すというようにして最後に四分音符を入れて楽しいものから落ちついたメロディーをつくり、そこをきき所としてほしいと思います。</p>

V おわりに

タブレット型端末を活用した創作の授業実践を通して、中学校音楽科の創作の授業の問題点の中でも、特に生徒の記譜力・読譜力・演奏技能不足の問題について考察を行ってきた。これまで述べてきた様に、タブレット型端末を活用した創作の授業は、これらの問題を解消する糸口があるばかりではなく、生徒のアイデアを広げ、創作する楽しさや喜びを体験することにつながるのではないかと考えている。

今後は、生徒による学習の記録やワークシート、保存されているプロジェクト、発話分析等から、生徒の創作過程での思考を探っていききたい。それにより、タブレット型端末の可能性だけではなく、どのような学習活動や発問、働きかけが有効であったかが明らかになると考える。また、アンケートを利用して、タブレット型端末の有効活用の可能性とともに、他の電子機器や電子楽器との関連を模索していききたいと考えている。

- 5) 前掲2), p.12
 - 6) 前掲4), p.64
 - 7) 藤沢章彦 (2008) 『中学校 音楽科 新学習指導要領ガイドブック ポイントと事例』教育芸術社, p.58
 - 8) 前掲3), p.6
 - 9) 森山潤ほか (2013) 『iPad で拓く学びのイノベーション—タブレット端末ではじめる ICT 授業活用—』pp.60-61, 高陵社書店, pp.60-61
 - 10) 同上, pp.72-73
 - 11) 同上, pp.114-115
- 小池幸司・神谷加代 (2013) 『iPad 教育活用 7 つの秘訣～先駆者に聞く教育現場での実践とアプリ選びのコツ～』ウイネット出版
- 矢野耕平 (2010) 『iPad で教育が変わる』マイコミ新書
- 総務省 (2012) 『教育分野における ICT 利活用推進のための情報通信技術面に関するガイドライン (手引書) 2012小学校版』
- 総務省 (2013) 『教育分野における ICT 利活用推進のための情報通信技術面に関するガイドライン (手引書) 2013～実証事業 3 年間の成果をふまえて～小学校版』
- 総務省 (2013) 『教育分野における ICT 利活用推進のための情報通信技術面に関するガイドライン (手引書) 2013～実証事業 2 年間の成果をふまえて～中学校・特別支援学校版』

註

(北海道教育大学附属札幌中学校教諭)

- 註1) 日本音楽教育学会 平成25年度北海道地区例会にて「作曲者・演奏者・鑑賞者の視点を生かした音楽科授業」、平成24年度北海道地区例会にて「作曲者と演奏者の視点の違いを生かした創作活動」をそれぞれ発表。
- 註2) 本実践は、第1学年〈A表現／創作ア・イ〉、第2学年〈A表現／創作ア・イ〉として実践しているが、本文は第1学年の実践を基本として構成している。
- 註3) 本校の実践発表における写真の掲載については、事前に保護者の了承を得ている。

引用・参考文献

- 1) 今村央子・酒井美恵子 (2012) 『表現力アップの仕掛けが満載! 「創作」成功の授業プラン』明治図書, p.3
- 2) 坪能克裕ほか (2012) 『音楽づくりの授業アイデア集』音楽之友社, p.6
- 3) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社, p.63
- 4) 同上, p.64